

多喜二鎮魂の絵 「走る男」にかかわった 4名の女性群像



北海道大学医師会
北海道医療大学

上野 武治

激動の2015年を6回目の年男として迎えるに当たり、1930年代の暗黒時代に命を賭して闘った方々が深くかかわった油彩「走る男」(図。80.3×60.5)を紹介したい。

2001年から市立小樽美術館にあるこの絵は、治安維持法違反で服役した小樽出身の画家・大月源二(1904-1971)が出獄翌年の1936年に制作し、従来、「獄中体験を描いたもの」と見なされていた。筆者は6年前にリハビリテーション関係学会を開催した際、この絵を「リハビリテーション」の語源「権利回復」に最もふさわしいと考えて学会のポスター等に用いた。その後、制作過程や表現、小林多喜二(1903-1933)との交友を調べるうちに、この絵は中学時代からの絵の友人かつプロレタリア運動の盟友で、1933年2月に虐殺された多喜二鎮魂のために制作されたと考えた(文献)。

この絵は、1937年に母校・東京美術学校(現・東京芸大)同級生の展覧会に出品されたが、当時の徹底した弾圧下で「男が多喜二」とは気付かれないようにさまざまに工夫されていた。しかも、この絵は誕生から小樽美術館の購入に至るまで、数奇な経過をたどっている。例えば、この絵はその後公開されることはなく、大月死後の遺品整理中に見つかり、これまでに4名の女性が深くかかわっていた。ここではこれら女性たちを紹介する。

まず、絵の誕生にかかわった女性、それは地下活動中の多喜二を助けて結婚し、杉並区の小林家で遺体に対面した際に「くやしい! ちくしょう!」と泣き叫んだ後、周囲から姿を消した伊藤ふじ子(1911-1981)である。大月の死後に見つかった記録には、1932年6月から勾留中の豊多摩刑務所内で転向し、1933年10月に保釈された後、「伊藤ふじ子の訪問を受けた」と記されていた。ふじ子は多喜二の友人・大月に、多喜二との地下生活や遺体の様子、無念の気持ちを伝えるために訪れたのであろう。大月は1934年2月、懲役3年の刑で甲府刑務所に下獄したが、獄中のスケッチブックには「下絵」が描かれていた。筆者はふじ子の怒り・悲しみがこの絵誕生のきっかけになったと考えている。

次に、結婚前に「『走る男』を印象深く見た記憶がある」と語り、結婚後は特高による監視下の時代を含め、苦勞しながら大月の画業を支えた豊子夫人

(1910-1993)である。夫人はこの絵が戦後初公開された1983年の「大月源二展」終了まもなくの12月末、「世話になった」知人に寄贈した。ただ、この「知人」とは誰なのか、遺族も分からなかったが、その後の調査でこの知人は1932年11月、多喜二虐殺の3ヵ月前に特高に殺された岩田義道(1898-1932)の妻・阿部(当時、安富)淑子(1903-2002)であった。豊子夫人はこの絵を、多喜二と同時期に殺された岩田の元妻に贈ったのである。

3人目の阿部は新潟女子師範で美術教師を勤めた後、市川房江らの婦人選挙権獲得運動に参加のため上京、6ヵ月間、逮捕・拘留された後、岩田の秘書・妻として地下活動に入り、再び逮捕・投獄された。戦後は弾圧犠牲者への国家賠償を求める運動を終生続けた。豊子夫人から寄贈された際、「あまりの勿体なさにどうしてよいか分かりません」と返電しているが、小樽美術館が購入した画廊によると、阿部は「この絵は個人的に所持しておくべきではない」と言って懇意の社長にその処置を託したという。

4人目は東京の画廊から多喜二・大月の故郷に戻すために尽力した市立小樽美術館学芸員の星田七重氏である。氏は2000年、「大正アバンギャルドからプロレタリア美術」展オープンのテープカットを、偶然にも伊藤ふじ子の夫で夕張出身の政治漫画家・猪熊猛(1907-2004)に依頼、2004年には「生誕100年大月源二展」も開催している。

絵「走る男」は多喜二鎮魂にふさわしい経過をたどりながら、彼らの故郷・小樽の美術館に納まっている。この絵には、当時、全くの無権利状態にあり、治安維持法のもう一方の犠牲者であった女性たちと、彼女らの精神を受け継ぎ、新憲法下で育った女性が深くかかわっているのである。(故人は敬称略)

【文献】

上野武治：大月源二の絵「走る男」が現代に問いかけるもの～歴史問題の清算と障害者の権利回復との関連～、北星学園大学社会福祉学部北星論集、51：161-187、2004(同大図書館HPでアクセス可)

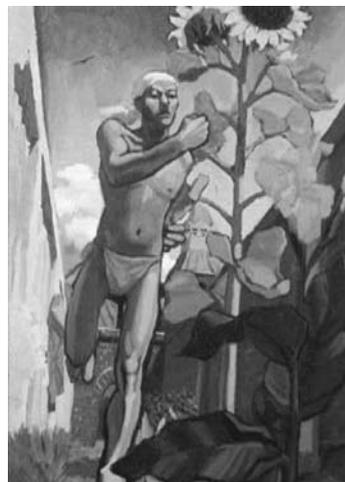


図 走る男(大月源二 1936年制作)
市立小樽美術館蔵